
孫呉ルート

眼鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孫呉ルート

【Nコード】

N1681BA

【作者名】

眼鏡

【あらすじ】

冥琳と雪蓮の幸福。

太史慈と孫瑜の友情かな。

輪廻転生

この世界に生まれ変わって数週間ほど、今日も良い天気だ。

俺を産んでくれた母上殿は黒髪ポニテで色白美人だ。とても優しい、ただ後年この考えは覆される。そんな母上殿に色々とお世話になり、羞恥プレイにも幾分か慣れた。

最初は訳が分からなかったが考える時間は山程ある、と言うか今は考える事しか出来ない、そして身動き出来ない事は想像以上に不便だ。

前世の記憶と知識は、臃げに、何と無く、曖昧に、覚えている。多く考える事は何故転生したか、運が良いのか悪いのか偶然か運命か、とりあえず哲学って難しい。

光陰矢の如し、十二になった。武術弓術剣術気など色々な事を仙人みたい爺から学んでいる。この爺はド偉く強い、いつもボコボコにされて修業が終わる。

漢文は少し違和感があったが、直ぐに読めるようになった。算術は楽々出来る、多分だが前世で理系だったんだろう。

そして解った事が一つある、最初は別世界だと考えていたが違ったらしい、歴史は苦手だが孫堅とか黄巾とか聞けば流石に此処が三国志の世界だと言うのが分かった。ただ三国志を詳しく知らないので、

大きな戦や有名武将しか分らない。
後は優しい義父が出来た、母上殿にはもったない程の人物だ。

またまた光陰矢の如し、十七になり、爺にも勝ち越す事が出来るようになった。母上殿や義父から学問を多く学んだ。そして三年前に義弟が出来たが、これがトロけるように可愛くてプニプニだ。

ちなみに俺の名は、姓は太史、名は慈、字は子義、真名は誠だ。

うららかな昼下がりに俺は母上殿に呼び出されて、聞いた第一声が「お前さ暇だろ、だから上奏文じょうそうぶんを持つてる青州の使者をどうにかしてこい」である。

もう少し解りやすく最初から説明してくれと母上にお問い合わせした。簡単に言うと『青州（敵）と東萊郡（俺達）の間で訴訟になり上奏文を先に報告した方が勝ち』らしい、で青州の奴らの邪魔もしくは上奏文をどうにかしろと言う。あの糞ば：失礼、母上が言うには子が親の仕事を手伝うのは当たり前なんだそうで、まあ俺は面白そうだから良いかなと思いき馬を走らせて洛陽に向かった。

そして上奏文の検閲所に到着してみると、そこには青州の使者が既に居て順番を待っている所だった。あまり良い方法が思いつかな、まあ、なるようになるかと思いきながら青州の役人に声をかけた。

「上奏文を出す前に間違いが無いか確認をするので見せてください」

「わかりました、お願いします」

悪いな、と心で謝り一気に上奏文を破り捨てた、そんな時の青州役人達の顔はポカ〜ンとしていて不覚にも少し笑いそうになった。

「なっ、なんて事をするんだあ」

「まあまあ、落ち着けよ。俺もアンタ達もこのままでは処罰される、だから一緒に逃げようやあ」

そして俺達は遼東郡へ逃げ出した。

遼東郡に到着して元青州役人達と別れ告げて、これからの事を考えた。上奏文を破いたし青州の人達には怨まれるだろうな、もう青州には行けない。

あの母は心配するだけ無駄だが、ただ心優しい義父と可愛い義弟は心配だ。

とうぶん帰れそうにないから仕事でも探すかな。

まあ、とりあえず小籠包でも食うかなあ。

金石之交（前書き）

金石之交

きんせきのまじわり

意味

いつまでも変わらない友情。

金石之交

久しぶりに家に帰るかなあ、半年たったし大丈夫だろう。そんな感じで東萊郡を目指し、遼東郡から出発した。

晴れ渡る空、生い茂る緑、そして馬鹿で間抜けな賊共。賊Aや賊Bが騒いでいる、まったく五月蠅い奴らだ。弱い奴には興味無いんだよなあ、疲れるだけだから。

「今すぐ決めてくれ、死ぬか逃げるか、どっちが良い」
俺が、そう言うのと。

賊Eの掛け声の元。

「馬鹿かお前、野郎共やつちまえ」
馬鹿な賊共は俺に襲い掛かって来た、助かる命を無駄にするなんて本当に救えない。

五人目の賊を切り捨てて一息ついた時に、丁寧な口調で声が聞こえてきた。

「手助け、いりませんでしたね」
振り返って見ると赤毛赤目で日に焼けた爽やかな笑顔の好青年が、そこには居た。

「都昌にある書や竹簡を読みたくて、向かっている所です」
成る程な、今も手に本を持ってるしな。

「へえ、書を読む為に都昌まで行くのか、途中の東萊郡に俺の家があった竹簡なら結構あるし書も少しならあるけど、来てみるか」

眼を輝かせ即答で。

「それは是非とも行きたいですね、どんな書や竹簡があるんですか」
本に関する食いつきは、ハンパなかった。
そんな感じで書物の話をしながら日が沈んだ。

真つ暗闇で、たき火の炎しかない山の中、空を見上げると木々の間から馬鹿みたいに綺麗な星が輝いているのが見えた。

「星が好きなのですか」

阿呆みたいにずっと見ていたからか、そんな事を聞かれた。

「好きか嫌いかで言えば、好きなのかねえ、でも正直に言えばこれ
といって好きなモノが無いな、そうゆうモノあるか」

俺がそう聞くと、少し微笑んで、優しく、強く、はっきりと、答えた。

「ありますよ、どんな事をしても欲しい者、たった一つだけ欲しい
者が」

俺は少しばかり面食らったと思う、さっきまでの優しいノンビリし
た眼では無く、熱く燃えるような瞳だった。

「女か」

俺が聞くと、じつと俺の目を見て答えた。

「はい、そうですよ」

真つ直ぐな男だなあ。

「アンタ程の男にそこまで想われていたら落ちない女なんていない
だろ」

困ったような苦笑いをして、少しためらってから話し出した。

「弟のように思われているんです、それに…、従姉妹なんですよ…。
軽蔑しますか」

この時代はイトコ婚って駄目なんだっけ、少し逡巡してから。「軽蔑しねえよ。まあ、良いんじゃないか、確か武帝も従姉妹と結婚しただろ」

そう言うと、少し驚いたような顔をした後、真剣な表情でゆっくりと話した。

「でも建前上は駄目でしょう、それに外聞も悪いのは事実です。でも絶対に手に入れます、絶対に」

最後は爛々と瞳を輝かせて、そう言い切った。

自然と心から言葉が出てきた。「面白い男だな」と。

俺が、そう言うと直ぐさま切り返してきて。

「そうですね、貴方も十分に面白い男だと想いますが。それと名乗り忘れていました、姓は孫、名は瑜、字は仲異、真名は牙連と申します」

流るる石の如く一気にさらりと言い切った。俺はその時、相当な間抜け面をしていたと思う。

この世界では、本人の許しもなく真名を読んだら殺されても文句を言えない。それぐらい大事なモノののほほなのに。

そして、またまた素直に言葉が出てきてしまった。

「何故、真名まで許したてくれたんだ」

にっこりと笑って、

「勘です」

自信満々に牙連は言い切った。

ひとしきり笑ってから。

「俺も名乗ろう、姓は太史、名は慈、字は子義、真名は誠だ」

牙連は、びつくりした顔をして、ナチュラルに俺の真名を呼びながら話し出した。

「誠が、あの太史慈子義だったんですか、凄く有名になってますよ。堂々と検閲所に乗り込んで役人全員を倒し、瞬くまに上奏文を破り捨て消えて行ったって」

へえ、そんな噂になってたのか、知らなかったな。

まあ、知らないオッサンやオバサン、爺さん婆さんが声を掛けてきたり食べ物くれたが、そうゆう事だったのか。

なんだかんだで話し過ぎて遅くなり、もう寝る事にした。

おやすみなさい。

帰路感慨（前書き）

適当に繋げた言葉です。

帰路感慨

あれからは何事も無く、昼頃には東萊郡に着いた。久しぶりに我が家を見ると、なんだか感慨深いなあ。

家に帰ると誰もいなかった…。とりあえず牙連を書齋に案内して居間に戻って茶をいれていると、

「ただいま、誰か居るか」

そんな声を掛けながら母上殿が家に入ってきた。

俺は納得出来ない気持ちで、渋々ながら出迎えの言葉を口にした。

「お帰り」

そして、この切り返しだ。

「ん、調度いい時に帰ってきたな。お前さ都昌に孔融という人物が居るからよ、その人が黄巾賊に襲われてるんだ。助けに行ってくい」

半年ぶりに帰ってきた息子に、これだよ。

「なんで…、つか詳しくお願いします、わからないから」

この愚息は、とため息をこぼして話し始めた。

「若い時に助けてもらってな、その時の恩がある。知っての通り私は右足が無い、戦は少し厳しい。だから息子であるお前が行け、出来るだろ。」

母上殿は若い時に戦で怪我をして右足をなくした。ちなみに、その時の医者俺の父親で、俺が三つの頃に亡くなった。

義父と義弟が帰ってきたので、俺は直ぐに義弟と遊ぶ事を決めた。

久しぶりに見る義弟はやんごとなく可愛いく、とても癒されながら戯れた。幸福だ。

義弟と遊び終わり、俺は書齋に向かった。そこには、ほぼ最初と変わらない姿のまま牙連が居て、違っていたのは本だけだった。

「どうだ良い書はあつたか」

牙連は眼を輝かして。

「医学書が多いね。他にも見た事ない書があつて凄く面白いよ。」
「死んだ父親が医者だったからな。まあ、それは良かった」

とりあえず俺は母上殿と話した内容を解りやすく牙連に話した。

「と言う事なんだ。都昌には黄巾賊が居るから今は行かない方がいい。俺は明日にでも出発するが、牙連は好きなだけ、ゆっくりしていってくれ。」

牙連は首を振って、

「僕も行くよ。元々、都昌に行く予定だったからね。」
笑顔で、そう言った。

「そうか、ありがとう。なら手合わせしないか」

強い事は分かるが、力量を出来るだけ知っておいた方がいいだろう。命を預ける事もあるだろうしな。

牙連も頷いてくれた。

キンツ、ガンツ、ガキンツ、俺達は剣劇の音を鳴らしながら戦っていた。牙連は想像以上に強い、苛烈で豪快で鮮やかだった。そして俺は闘いが楽しいと感じていた、だんだんボルテージが上がってきていて本気を出してやるうかと思つた、調度そんな時に牙連は距離をとって。

「これぐらいで、いいでしょう。これ以上やると大変な事になるの
で、終わりです」

確かに、とも思いつながら俺は残念でしょうがなかった。

ふう、少し頭でも冷やすか。

「大変な事になる」その時の俺は、その言葉の意味を勘違いしてい
た。

東奔西走（前書き）

コノ盃ヲ受ケテクレ

ドウゾナミナミ灌ガセテオクレ

花ニ嵐ノタトエモアルゾ

「サヨナラ」ダケガ人生ダ。

井伏鱒二「勸酒」

（「厄除け詩集」筑摩書房刊）

東奔西走

東萊郡を朝早くに出発して、日が沈む前には都昌近郊に着いた。

都昌、近くの茂みの中に俺達は隠れていた。

「黄巾賊が、なかなか多いな。入り込むのが厳しいねえ」

「でも、まだ完全には囲まれていないから、夜を待って都昌に入れ
ばいいよ。それにしても誠の母上は、少し無茶を言うね。」

「素直に言ってくれていいぞ、無茶苦茶だって。俺は、もう慣れた
けどな」

自分で言って悲しくなった。

夜の帳が降りて、数時間後。

「さ〜て、そろそろ行くかあ」「うん、行こうか」

暗闇の中を移動して、都昌と黄巾、両方に気付かれる事なく、すんなりと城壁の下まで、たどり着いた。

俺は腰に差していた蛇腹刀を抜いた。

「それで、任せろって言ってたけど、どうするんだい」

「まあ、見てろよ」

この蛇腹刀、母上殿が言うには家に代々伝わる刀らしい、始めて見た時には「蛇尾丸」だ、と分からない単語が浮かんできたが、あまり気にしていない。

この蛇腹刀を俺は使いこなせていない、操る事が難しく、いつもは「突起の付いた刀」として使っている。

大きく後ろに振りかぶり、俺は祈りながら刃を伸ばした。運よく良い具合に引っ掛かったようで、安心した。繋ぎ目と峰の部分を掴み足場にして、城壁を登って行った。

「あの刀、本当に伸びるんだね。今度、詳しく見せてよ。」
縄に縛られ武器を取り上げられて、こんな状況で呑気だなあ、と俺は感心していた。

何故こうなったかと言うと、牙連が城壁を登り終える所で調度、見回りの兵士が来て、俺達はおとなしく捕まる事にした。

幸いに、あの元青州役人が居て本人だと証明してくれて、直ぐに縄を解いて武器を返してくれた。

ちなみに孔融のオッサンは、あの孔子の子孫らしい。

それで孔融のオッサンに作戦とか有るのかと聞いてみたが援軍が来るまで籠城すると言う。

ただ、どこから援軍が来るのか曖昧で本当に来るか心配だ。

今ならば、まだ黄巾賊を潰せると思うが打って出る気は無いようだし、兵を貸してくれば俺がやるが、まず貸してくれないだろう。

黄巾賊も攻めあぐんでいるが、このままでは、じり貧になって終わる。

「早くどうにかしないと、黄巾賊が集まってきて完全に包囲されるね」

牙連も俺と同じ考えらしい。

どうしたもんかと二人で考えていたが、刻々と夜が更けていった。

あれから四日後、黄巾賊に激しく攻められている。完全に都昌は包囲されて、都昌の兵力だけでは到底覆せないようになっていた。そして孔融のオッサンは、ようやく重たい腰をあげて、平原に居る劉備に援軍要請の使者を出す事にしたようだ。

俺は胸中で思い切り叫んでいた「今更かよ」「つか使者を出してなかったのか」

いや気付かないでいた俺が悪いな。すんだ事は、しょうがない。冷静になって落ち着こう。

完璧に包囲されている中、わざわざ使者になろうとする奴がいるわけもなく、他の奴らに任せるのは不安過ぎて俺は自分で引き受ける事にした。

「真っ直ぐ突っ込んで行かないよね」

牙連よ、お前は俺を殺したいのか。

「死ぬわ、なんで牙連の中で俺は猪突猛進な人になってんだよ、一応は考えがある」

「誠が知り合いに似ていてね。考えがあるなら良かった、僕も手伝うよ」

とりあえず牙連に作戦を話して、意見を聞いてみた。

翌日。

作戦一日目。

俺は弓矢を持って、兵士三人には的を持ってもらい、朝早くに門を開け城外に出た。

黄巾賊は、それを見て攻めて来ようとしたが。

城門の前で、さっさと三射を射って直ぐに戻った。

作戦二日目。

昨日と同じく、三射を射って直ぐに戻る。黄巾賊の中には、少し動く者もいるが、またかと興味が薄くなっている。

作戦三日目。

黄巾賊は、ほとんど興味を示していないようだ。

牙連が三射を射ったの確認して、俺は馬を一気に走らせて一騎で城門から飛び出した。

黄巾賊は、最初ポカ〜ンとしていたが慌て追いかけてきた。

追って来た賊三人を三射して仕留めたら、誰も追ってこなくなった。意外と上手く行くもんだな。

「劉備玄德殿、お初にお目にかかる。我が名は、太史慈子義。都昌が黄巾賊に襲われている。出来れば今直ぐに三千ほど兵を貸して頂きたい。」

自分で自分の冷静さを褒めてやりたい、だって劉備、カンウ、チヨウヒ、が女なんだよ。

びっくりした、びっくりし過ぎて馬鹿みたいに丁寧口調で喋ってしまった。

男が一人居たが、なんか違和感がある名前だった。

少し相談をしてから、快く貸してくれた。武将二人も着いてきてくれるようだ。

三千の兵を引き連れて平原を出発し都昌を目指した。

黄巾賊は、無駄に足掻く事もなく直ぐさま逃げ出した。挟撃されるし、分が悪いからな。
つまらんけど、見事な判断だ。

それから何故か劉備軍の一刀と言う男に勧誘されたが断った。誰かに仕えるなんて考えた事がなかった。

少し考え事をしていたら、向こうから牙連が歩いて来た。

「お帰り、一騎駆け。勇猛だったよ」

「ただいま。ありがとよ」

これで孔融のオツサンにも恩返し出来ただる。さつさと家に帰れるなど思っていたが、そうは問屋が卸さかった。無駄に活躍したせい
か孔融のオツサンに気に入られて、宴会に付き合わせられた。少し
飲み過ぎたなあ、酔いでも醒ますかあ。

城壁の階段を登ると既に牙連が月見酒をしていた。

俺達は、言葉を交わす事なく、ぼーっと夜空の月を見ていた。

その時の俺は、酒と月に酔っていたんだと思う。

ぼつりぼつりと話し始めた。転生の事、この世界の事、しばらくして話し終えて聞いてみた。

「信じるか」

「信じるよ」

そして今度は、牙連がぼつりぼつりと話し始めた。

「僕はね、誠。好きな人に害をなそうとした兄を殺したんだ。後悔はして無いと言えは嘘になるけど、やってよかったと思ってるよ」

「軽蔑、しました」

「軽蔑、しねえよ」

それっきり、俺達は、また黙り込んだ。

一騎打ち

あれから、二年がたった。

牙連と別れて一度家に戻り、あてもなく旅をして、久しぶりに家に戻ろうかと考えていた。

俺が飯屋を探していると、声を掛けてきた奴がいた。そいつは劉ヨウの使者で、劉ヨウが同郷のよしみで俺に会いたいと言っているらしい、確か劉ヨウは將軍の位だったかな、飯が出るだろうし、俺は会いに行く事にした。

間が悪かった。

劉ヨウに御目通りしている時に孫策軍が攻めて来た。

そして俺は劉ヨウ配下の人達に力を貸して欲しいと頼まれて、これも縁かと思ひ助力する事にした。

孫策伯符か「江東の麒麟」だったかな。面白くなりそうだ、いつちよ頑張りますか。

劉ヨウ軍は、どこぞ孫策軍にやられている。そんな中で俺は、斥候をしていた。

劉ヨウ陣営の中に人物鑑定家の許劭（よこしま）と言う人物が居て、その許劭に俺は嫌われているらしい、で劉ヨウは許劭の目を気にして俺を使わないようだ。

俺は一度しか許劭に会った事はないんだが、ほぼ無視、噂だけで嫌われているのかね。まったく、どうしようも無いな。

そして今日も今日とて、斥候をしている。

さっそうと馬を走らせて俺達六人は、適当な所で二人組になり三方向に別れた。

目新しい物は無いか、真面目に斥候の仕事をしていると少人数の間が向こうから来るのが見えた。

この時の俺は相当にフラストレーションが溜まっていたんだと思う。

得に考えもせず、一気に駆けて先頭に居る女に刃を向けた。

一合だけ切り結で直ぐに、強い、と思った。

そして俺は「一騎打ちしないか」その女に言い放っていた。

「いきなりね、でも良いわよ」先頭に居た桃髪褐色肌の女は了承してくれただが。

「雪蓮つ、何を言っている」

黒髪で眼鏡をかけた褐色肌の女は相当にお怒りのようだ。

どうにか桃髪女が黒髪女を説き伏せたようだった。

黒髪女が俺の事を睨んでいる。

桃髪女は、待ちに待った遠足に行ける、そんな笑顔をしながら「待たせたわね。あなた太史慈子義でしょ」と聞いてきた。

俺は「そうだけど」と答えた。

桃髪女は「やっぱりね」と、うんうんと頷いている。

「黒髪黒目で三白眼の八尺もある大きな男、聞いた通りね。私の事、聞いてない」
うーん、誰だ、わからん。

銀髪褐色肌の弓を持った女の人が「名乗って、おらんじゃろうが」とヤジのような一声を言ってくれた。

「そうだったわね、ついすっかりしてたわ。我が名を名乗ろう姓は孫、名は策、字が伯符だ。牙連の従姉妹で江東の虎の娘よ、よろしくね」

ポカーンだよ、ポカーンとしていたよ。理解するまでに少し時間がかかった。

確かに孫だけどさ、孫策が従姉妹だったとは、どうしよ一騎打ち申し込んだよ、牙連に殺されるかも知れない。

そんな不安を感じとったのか。

「大丈夫よ、一騎打ちだもの私が死んでも、あなたが死んでも、恨みつこ無しよ、でも私を殺すのは無理でしょうね」そう言って剣を抜いた。

まあ、なるようになるか。

そんな感じで俺も刀を抜いた。数合を切り合つと楽しくなってきた、手加減なんて言葉は何処か遠くに行ってしまった。

お互い少しずつ傷をつくり、いったん距離をとった。

孫策は、頬の傷から出た血を指ですくい舐めると、すこぶる笑顔になった。怖いわ。

しばらくして鳴り響いていた剣戟の音が止んだ。それにもない俺

達二人の動きも止まった。俺の刀は孫策の首に、孫策の剣は俺の喉元に、動けず睨み合っていた。

そんな時に眼鏡女の声が聞こえてきた。「両者互角で良いだろう、お互い刃を引け」

孫策は距離を取り俺を指差しながら叫んだ。

「でも冥琳、こいつ牙連を男色にした変態よ、成敗しないと気がすまないわ」

ちよつと待て、なんだ、それ。

なんとか懇切丁寧に説明して、俺は誤解を解いた。

今日の所は、お互い引く事にして陣地に戻る事になった。

牙連の趣味がわからんな。あんな狂暴そうな女どこが良いんだ。

それはそれとして確か暗殺されるんだよな、牙連には伝えないとな。

防戦一方

あれから数日がたった。

孫策軍は押せ押せだが、劉ヨウ軍はボロボロだ。

劉ヨウは撤退する事にしたらしい。まあ、このままじゃ全滅するだらうしな。

しかし、まさかの此処で俺を丹楊の防戦を任せるとは、本当に無茶を言うなあ。

まあ、足掻けるだけ足掻くか。

そして俺達はゲリラ戦を開始する事にした。これなら俺の少ない部下で元山賊の者が多い部隊には調度良い戦法だった。

そんな感じで粘りながらも、徐々にでは有るが確実に戦線を押されていった。

そして、とうとう丹楊まで孫策の軍が押し寄せてきた。

いやあ、孫策軍が立ち並ぶ姿は壮観だねえ。さて、これから、どうするかなど、そんな事を考えていたら。

牙連が一騎で出て来て、大きな声で話し始めた。

「太史慈子義殿と一騎打ちにて決着をつけたい返答はいかに」

牙連は、やっぱり面白いな。

「少し話しをしてくる」

仲間達に、そう言って俺は城門から歩いて向かった。

牙連はニツコリしながら

「誠なら絶対、来ると思ってたよ。」

「馬鹿野郎、ただ俺は一騎打ちで俺が勝ったら孫策軍はどうするか、とりあえず聞きに来ただけだ」

また笑いながら

「僕に一任されたからね、誠が望むままに、して良いよ。ただ誠が負けたら僕達に協力して欲しい、良いかな」

「お前さつきから笑い過ぎだ。気前が良いね、そんなに俺に勝つ自信があるのか」

真剣な表情で

「あるよ」

短く一言だけ、言い放った。

「ならやるか」

少し距離を空けて俺達は向かい合い同時に刀を抜き、構えた。

行くぜ、その掛け声を発して俺は牙連に激突して行った。

数十合を切り合い、鏝ぜり合いをし、俺は飛びながら牙連の刀を避けた。

「軽業師みたいだ、ねっ」

「そうか、よっ」

切り結び、少し距離をとった。

行くぜ、心の中で呟きながら俺は蛇腹刀を伸ばした。

牙連は少しだけ驚いた顔をして直ぐに真剣な表情になった。

やるねえ、初見で大体の奴が終わるって言うのに、よっ。

「それ、伸ばせて鬪える、ように、なったんだね」

牙連は、蛇腹刀を、かわしながら、そう言った。

「人間、日々進歩するもんだろ」そう言ってやると、牙連が迫ってきて、

ゆっくり優しく話し始めた。

「誠…、本気を出すよ。死なないでね」

ゾクツとした感覚の後、俺は文字通り、数メートル、吹き飛ばされた。なんとか体勢を整えたが、その後は防戦一方だった。防ぐだけで手一杯だよ。

それでも数十合を持ちこたえた俺を褒めて欲しい。

そして俺の刀は宙をまっつて、地面に音をたてて落ち、牙連の刀は俺の首横で止まっていた。

「僕の勝ち、だね」

ニッコリ笑って聞いてきた。

「お前の勝ち、だよ」

俺は、そう言っつて大地に寝転んだ。

その後、俺は仲間全員を説得して孫策軍に入る事になった。おもだった武将や軍師と顔合わせする事になり、その後、俺の処遇を決める事になった。眼鏡女、違った、周瑜公瑾は、俺を見て言い放った。

「私は反対だ、孔融や劉ヨウを渡り歩いてきた男だぞ、信じられん。それに色々と問題もある、いくら牙連の友でも私は直ぐに納得は出来ない。」

これは軍師としての意見だ、と付け加えた。

孫策は短息しながら。

「わかったわ、冥琳。子義、武器を預かるからいいわね。それで冥琳が見張りをしなさい。」

子義は早く冥琳から信頼を勝ち取りなさい」

これ決定、はい終わり」と言いながら部屋を出て行った。

それに続いて武将や軍師も出て行き最後に牙連が、

「誠、冥琳にも今までの事を話せば分かってくれるからさ」

「冥琳もお手柔らかにね」

そう言ってから、扉を閉めた。

そして俺と周瑜だけになった。

椅子に座れ、と周瑜に言われ。俺はおとなしく椅子に座った。その後は尋問のような話し合いをして時たま、ふざけた事を言っていると凄惨な形相で睨まれた。

そう言えば周瑜は病気で死ぬだったな、牙連も真名で呼んでいたし大切なんだろうな助けないと、そんな事を考えていたら周瑜に怒られた。

それからも、じつくりと尋問されて、とても疲れた。

キツイ女だなあ。

人員募集

翌日、俺は散々と周瑜に尋問を受けコテンコテンにされて疲れていたが、周瑜に許可をとって牙連と話す時間を貰った。

「昨日は大変だったようだね」

「大変なんてもじゃ無いぞ。あれは、地獄だった」

「冥琳は軍師だからね、色々と思う事があるんだよ」

それから、俺は俺が知っている事を牙連に話し始めた。

俺の世界の、孫策と周瑜の事、三国志の流れ、全てを話し終えた。

「わかった、ありがとう。」

雪蓮の事は僕が絶対に守るよ。冥琳、周瑜の事を…、誠に任せて良
いかな」

じっと牙連が見てくるので、

「わかった、いいぜ」

おもわず了承してしまった。

少し他愛もない事を話してから俺達は部屋に戻った。

周瑜は見た感じ健康そうだが、ただ病気は知らない内に体を蝕んで行く事が多いけど、多分だが周瑜は体の異変に気づくだろう。うーん、直接聞くしかないかなあ、当たって砕けるだ。じゅっと見ていたせいか周瑜は竹簡から顔を上げて睨んできた。

「さつきから、なんだ。言いたい事があるなら言え。」

「周瑜、お前さ顔色が悪いぞ。心配だから俺が診てやるよ」

周瑜は胡散臭そうな顔をして

「別に私は健康だ。それに、お前に診療が出来るのか」

「一応、気になるから診療したいんだよ。それに、これでも俺の夢は医者だ。小さい頃から勉強もしている。」

父の後を継ごうと思っていた、でも父が死んで俺は母に何故か言い出す事が出来なくて、それからボンヤリ生きてきた。今まで誰にも言った事は無かったのに、俺は口に出していた。

周瑜は驚いた顔しながら

「良い夢だな」

そう言って微笑んだ。

俺は、顔が赤くなっていたと思う。照れながら聞いてみた。

「馬鹿にしたり、疑ったり、しないのか」

「それこそ馬鹿にするな、これでも人を見る目はあるつもりだ、それに立派な夢だと思うがな私は」

診療を終えた。周瑜が言った通り、俺が診ても、健康そのものだった。ちよくちよく診療するしか無いな。

「健康だな、これからも定期的に診療して良いか」

「やってくれるのは有り難いが、出来るのか」

「おう、任せろ」

その後、俺は一般兵を診療し馬車馬の如く働かせられ疲労困憊になった。

そして翌日は、一般兵から聞いたのか大勢の人民が診療しにきた。もはや俺は死にそうになった。いや死んでいた。

周瑜よ、これは「お前の策略なのか」と阿呆な事を考える程に俺は疲れていた。

周瑜一人を診療するつもりだったんだがなあ。

まあ、医者としての第一歩だと考えれば良いかあ。

それと見張りも解除になり、周瑜には公瑾と呼ぶ事を許された。一歩前進だな。

そんな感じで数日を過ごして、ゆっくり出来るようにもなり、俺は爆睡をしていたが牙連に起こされた。

「疲れてるだろうけど、今日の軍議に出て欲しいんだ」

俺はしょうがなく行く事にした。

俺は、驚きながら声を出して、もう一度、確認をした。

「本当に劉ヨウが病死したのか」

最後に見た感じでは元気そうだったのに、一体どんな病気だったんだ。

そんな事を考えていると雪蓮が続きを話し始めた。

雪蓮とは酒を飲みながら、真名を交換をした。

「劉ヨウ軍をどうするか。なんだけど、冥琳、良い案ある」

公瑾は軍師らしく

「一気に殲滅すべきだな」

と言っていた。

俺は、お行儀よく手を挙げて

「俺は、劉ヨウの軍勢を仲間に出来るならと思う、説得に行っても良いか」

配下の者達は「太史慈は裏切るに決まっている」と言って反対していたが、

雪蓮は「それ決定。誠に全部、任せるわ」

公瑾も得に何も言わなかったので軍議は、お開きになった。

俺は劉ヨウの本拠地場州牧に行く準備をしていると、公瑾がやってきた。

「どうしたよ。釘でも刺しにきたか、安心しろ裏切ったりしねえぞ。」

「その心配はしていない。それで劉ヨウ軍を仲間にする考えはあるのか」

「まあ、どうにかなるだろ。あつちに着いてから考えるさ」

公瑾は溜め息を吐いて、もういい、と言って何処かに行ってしまった。

俺は丹楊を出発して、場州牧に到着した。知り合いの人達を見つけ主立った者達を集めて欲しいと頼んだ。戸惑いながらも頷いてくれた。

俺は雪蓮が、どれほど凄く偉大な英雄か、少し盛って話した。それ

で半数以上が孫策軍に士官する事になった。

後で分かった事だが公瑾が密偵を使い俺達の良い噂を流していたらしい。

すんなり俺の仕事は終わった。公瑾にでも酒を奢るかなあ、と考えながら丹楊に戻った。

仕事も終わっているだろうと、夕闇が包む頃に、公瑾の部屋に向かった。

「はいるぞお。酒、持ってきた飲まないか」そう言いながら近くの椅子に座った。

「まったく、少し待っている。キリが良い所まで終わらせる」

「まだ仕事やってたのか、いくらなんでも働き過ぎだろ」

「いつもよりは少ないんだがな」そう言いながら竹簡や書を片して、こちらに来た。

「それで、何か壊したか、困った事でも、あったのか」

「なんでだよ」

「私の所に来るのは、大体そんな人間ばかりだからな」

俺は少し呆れながら、公瑾に酒を注いだ。

「俺の自家製だ。そこらの酒より断然美味しいぞ」

公瑾は確かに美味しいなと言ってこれは売れるぞ、と商売勘定をし始めた。

俺は溜め息を吐いて、公瑾の頭を両手で掴み頭突きをした。

「お前、いきなり何をするんだ」額を手で押さえ睨んでいたが、少し涙目になっていて怖くなかった。と言うより…、違う違う何を考えてんだ。

「公瑾、色々と考え過ぎだ。たまには体を休めて頭からっぽにしてのんびり過ごせ。」

「考える事は私の癖で、考え中は落ち着ける。それに軍師たる者の常日頃から考えているものだ。のんびり過ごせと言われてもな、困る」

「オーケー、了解、理解した。今度の休み俺に付き合え、良いな。これ決定、わかったか。」まくし立てて言い放った。

「あ、ああ、わかった」

公瑾は、勢い流されながら頷いてくれた。

「まあ、とりあえず今日は帰るわ。じゃあな」

俺は、自分の部屋に戻った。

小春日和

公瑾は、あれから一向に休む事なく毎日働いていた。

俺は、牙連に頼み公瑾が休めるように手伝ってもらった。

まず簡単な竹簡や書をどんどん捌いて、簡単な物を部下達に配分した。

雪蓮と祭さんには、俺の自家製酒を牙連に持たせて書や竹簡を全て片付けたら、ご褒美としてあげる事を約束した。

ちなみ祭さんとは銀髪褐色の綺麗な人だが、酒が大好きなオヤジ臭い呉の残念美人の一人だ。

後は、わりと早くに真名を許してくれた人でもある。

そんなこんなで裏仕事を色々として、ようやく公瑾が丸一日、休める日を確保した。

あいつ…、一人で一体どれだけ働いているんだ。

ようやくと休みの日が来た。

「それで今日は、何処に行くつもりなんだ」

当然の疑問が公瑾から出てきて、俺は自信を持って「山だ」と、指を刺しながら叫んだ。

「そうか」

少し呆れる気味に頷いた。

馬を一頭を引いてきた所で、公瑾が不思議そうな顔をしたので「相乗りだ。いつも働きすぎだからなあ、今日は完璧に休んでもらう」
渋々ながら頷いて、公瑾は後ろに乗った。

綺麗な青空と緑豊かな原っぱ、その真ん中に木が一本だけ立っている。

「斥候している時、たまたま見つけた場所なんだ。綺麗だろ」

「ああ、良い場所だな。これから、どうするんだ」

「だらだらする」

公瑾は、少し間拔けな顔で聞いてきた。

「それだけか、他には」

俺は、うんともすんとも言わず首をすくめて見せた。

「まったく、こんな良い女が居ると言うのに、ハア」

呆れ顔で、溜め息を言葉にして発した。

俺達は原っぱに寝そべり、ぼくと晴れ渡る空を見ていた。

「暇だな」

「お前は殴られたいのか」

「冗談だろ、拳を下ろせ。所で公瑾はさ、夢とかあるのか」

「あるぞ。雪蓮の覇業を叶える事だ」
眼を輝かせて言い放った。

「夢と言うより野望だな」

「同じだろう、違うのか」

それからは、好きな物、嫌いな物、戦略や世間話など色々な話しをした。

腹が減ったので昼飯を食べて、近くにある小川を見に行った。

「水が、冷たいねえ」

「ああ。それに、とても水が澄んでいる」

公瑾は小川に足を浸して両足をぶらぶら動かしていた。

それが、とても綺麗で俺は見とれていた。

その時、ガサガサと茂みが動き子パンダが現れた。

「まだ、子供のようだな。」

公瑾は膝の上に子パンダを乗せて撫でていた。

「親とはぐれたのかねえ、どうしたもんか」

そんな話をして子パンダと遊んでいると森の奥から鳴き声が聞こえ、子パンダは素早い動きで駆け出して行った。

公瑾は、少し淋しそうに微笑み森の奥を見ていた。

原っぱに戻る事にして、木に腰を掛けノンビリとしていた。そのうちに俺の体に公瑾がもたれ掛かってきた、首の横から覗いて見ると寝息をたてていた。

俺は微笑み瞼を閉じて風を感じていた。

眠っていたのか、とボンヤリ考えていた。

「おいつ、起きたか」

公瑾が覗き込んでいた。

「ああ、それにしても随分と寝てたらしい」
辺りは、すっかり日が暮れていた。

「そうだな、私も先程まで寝ていたから少し驚いた」

うぐんと背伸びをして俺は立ち上がった。

「帰るか」俺は、そう言おうとして口をつぐんだ。
最初は見間違いかと思ったが段々と淡い光が広がり、辺り一面を覆って明滅していた。それは幻想的で儂くて美しかった。

「綺麗」

公瑾は一言だけ呟いた。

その後、俺達は長い間ずっと蛍の光を飽きる事なく見ていた。

丹楊に戻る馬上で。

「帰るのが、こんなに遅くなるとはなあ」

「別に良さ、とても素敵な物が見れたからな」

「それは良かった。今日は、ゆっくり休めたか」

「ああ、休めたよ。それに楽しかった。今日は、ありがとう」

丹楊に到着したが昼寝し過ぎたのか眠気がまったく無かった。それで公瑾の部屋で酒でも飲もうと向かっていると、通路の角から牙連が現れた。

「良かった、帰ってきたんだ。今日は帰らないかと思ったよ。早速で悪いけど大変な事があったんだ」

霊帝が崩御なせれた、と牙連は言った。

戦乱の夜が明ける。

虎牢劈開（前書き）

虎牢劈開

ころうへきかい

虎は牢屋を切り開く

適当に言葉を繋げました。

虎牢劈開

とりあえず俺達は袁術の元に戻る事にした。

しばらくして袁昭から「悪逆非道な董卓を討伐しましょう」と言う感じの文が来た。

雪蓮と公瑾は、反董卓連合軍に参加する事に決めたようだ。

我らが雪蓮、曹操や劉備など、三国志の英雄が集まっていた。

雪蓮と牙連と公瑾は軍議に出ていないので、俺は数少ない男の武将である韓当と暇つぶしをしていた。

韓当は眼鏡をかけた優男風だが、まあまあ強い部類に入る。

「お前さ、祭さんに告白しないの」

「僕には無理ですよ。高嶺の花です。それに見ているだけで十分です」

「男なら、当たって砕けるだ。」

「砕けるんですか。そう言えば誠殿には、好いている人、良いと思う人は、いないのですか」

「うーん、得にいないが敢えて上げるなら公瑾かな」

「なるほど、あの鞭で打たれたい、と言う事ですね」

「お前、絞め殺されたいの」

そんな馬鹿な話を適当に話していたら、雪蓮達が戻ってきた。

総代将は袁昭になり、先方は劉備軍と牙連の部隊になった。

何故かと言うと劉備軍の一刀が袁昭と揉めて、牙連は俺と別れた後に揉め事になり少々手荒な方法で解決したので、怨まれていたらしい、袁昭は子供か。

「いつか袁昭も袁術と一緒にぶつ殺すわ」と雪蓮は物騒な事を言い、公瑾は「お前なら大丈夫だと思うが、一応言っておく無茶をするな、後は兵を減らすなよ」と牙連に言っていた。

「余裕だろ」

俺は呑気に言ったが、牙連は溜め息を吐いて言葉を口にした。

「戦う事が嫌いなんだ、お茶でも飲みながら本を読み、ゆっくりノンビリ暮らしたい」

あれほど強いのに戦う事が嫌なのかと不思議に思った。

俺が黙っていると牙連は「誠、一緒に来てくれないか、もしものは止めて欲しい」不安な表情で、そう言ってきた。

疑問に思ったが、とりあえず頷いておいた。ただ、この疑問は直ぐに解決される事になる。

虎牢関の前まで進軍して、予定通りに牙連が前に進んで行き、華雄にヤジを飛ばしている。

華雄は孫堅に負けていて、甥の僕が言えば出て来るかも、と牙連が

言ったので、こつちゆう事になっている。

酷い事を言うなあ、と俺でも思う程、凄じ言葉を口にしていた。

そして華雄は出てきた。

俺は、あんな事を言われたら誰だつて出てくるよ、と心の中で華雄を庇護していた。

それに続いて張遼が出てきて、「華雄、戻れやあ」と叫び、呼び戻そうとしていたが、牙連は上手い具合に華雄を引き寄せて袁術軍と戦わせていた。

そんな時に「呂布だ、呂布が出た」まるで怪物が出たように兵士が叫んでいた。

兵士が、どんどん吹き飛んでゆく、そして段々ここち近づくに近づいて来ているようだった。

マジかあと思ひながら、覚悟を決めて向かう事にした。

呂布は、べらぼうに強い牙連並か、それ以上だ。俺は数合を打ち合ひ吹っ飛ばされた。

吹っ飛ばされて倒れてる所に呂布が来てヤバイと思つてしていると絶妙なタイミングで、血だらけの牙連が、現れた。

おいおい大丈夫かよと思つて、よく見ると傷は無く、おびたらしい返り血だった。

一安心して、主役は遅れてやって来るものなんだなあ、その時の俺は呑気に思つていた。

呂布は「お前、強い」と牙連に言い二人は激突した。

暴風雨もしくは雷のような激しい闘いをしている。攻めぎ合いどころも一歩も譲らず戦っているように見えた。

そんな中、華雄は重傷を負け敗走し、張遼は曹操に捕まった。

陳宮が叫び、わめき立てていると、呂布は一旦距離を取った。呂布は傷を負っていたが、牙連は無傷だった。

陳宮に何か言われて呂布は頷いて「勝負、預ける」と牙連に言い放ち、陳宮が何か投げると辺りは煙幕に包まれて、煙幕が晴れると呂布と陳宮の二人は消えていた。

牙連に声を掛けよとしたが、いつもと雰囲気が違う事に俺はようやく気づき、声を掛けるのを躊躇っていると、静かに歩き出し近くにいる敵兵を片っ端から切り捨て始めた。容赦無く皆殺しにするような勢いで進み、武器を捨てた兵士にまで刃を向けた。

ガキンツ。

俺は何とか刀で受け止め。

「何やってんだ、牙連」

そう言ってから牙連の顔を見ると、眼は血走って荒い息をあげていた。

牙連は、いつも通りの口調で、「誠、どいて。敵を殺さないとそれに邪魔するなら切るよ」

そう言っって薄く笑った。

「正氣に戻れ、この馬鹿が」

「二度は言わないよ」

そう言っつて牙連は切り掛かってきた。

無茶な事を言っつてくれるなあどうしろっつて言っつんだよ。

おかしくなつた牙連と切り合つていたが、本当に容赦が無い本気で殺しにきている。マジで無理だ、ヤバイ、そう思つた時には刀をかち上げられて胸を切られていた。

胸が焼けるように熱い、血がわんさか出ている。ギリギリまだ生きていた。

俺は言葉を振り絞り

「しっかり、しろ。そんな事じゃあ、雪蓮を守れねえぞ」
そう言っつて、意識がとんだ。

次に気がついたのは、天幕の中だった。意外と死なないもんだなあと思つてしていると、横に公瑾が椅子に座つて本を読んでいた。

「気がついたか、死んだかと思つたぞ」そう言っつて読んでいた本を机に置いた。

「おう、生きてたわ。所で牙連はどうしたよ」

「お前を連れて来て、いつの間にか消えていた」

「誰に切られたか知つてるか」

公瑾は無言で頷いた。

「牙連が、ああなる事は知つてたのか」

公瑾は首を振りながら

「いや知らなかった。雪蓮も知らなかったようだ」

まあ、そうだろうなあ。

「雪蓮も血を見たり戦をすると似たようになるが…、あそこまでは変わらない。今、雪蓮が牙連を探しに行っている」

それから俺達は、黙り込んだ。

しばらくして、雪蓮と牙連が一緒に入ってきた。

牙連は、二人切りにして欲しいと雪蓮と公瑾に言い、二人は出て行った。

「ごめん」

「別に気にしてねえよ」

「でも…、ぐっ」

まだ何か言おうとしたので、寝台から出て、とりあえず牙連をぶん殴ってみた。牙連は倒れずに持ちこたえた。

怪我人には辛いな

「面倒臭え、俺が良いと言ってんだ。それに止めてやる約束だっただろ、俺は俺がやりたいようにやっただけだ。それに生きてる」最後は笑って言った。

牙連はポカンとした顔をしていたが。「わかったよ」苦笑いして頷

いた。

寝台に戻り、少し世間話をして牙連は帰っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1681ba/>

孫呉ルート

2012年1月6日00時50分発行